

いる場合は、きみが幼い頃から育った家であり、部屋だ。そのそこかしこに父の記憶が刻まれている。メールを打つPCは、数多くの（繰り返すが自然をも含んだあらゆる）誰かたちが材料を産みだし、収穫し、運び、精製し、デザインし、形成し、広告し、流通させ販売していまここにあるものだ。それらのすべての連なりの先に——あるいはこの瞬間の共振として——いま、このときが出現している」⁽¹⁴⁾。

つまり〈自己存在〉は、いまこの瞬間においても、この〈関係性〉の網の目を通じて「私」となっている⁽¹⁵⁾。そしてそれゆえ、瞬間的に出現するそれぞれの「私」は、確かに「私」ではあっても、一度として同じものではないとも言えるのである。本書では、この〈自己存在〉の背後にあって「共振」する無数の「〈我-汝〉の構造」を指して「〈関係性〉の場」と呼ぶことにしよう。

(3) 「人間的〈関係性〉」における〈間柄〉の概念

以上を通じて、われわれは〈自己存在〉とは何か、〈他者存在〉とは何か、そして両者をめぐる根源的な原理である「〈我-汝〉の構造」というものについて見てきた。しかしわれわれが前述した「中核的他者」、すなわち時空間を共有し、日々接触する「現存する顔見知りの人間」との間に〈関係性〉を成立させる場合、「〈関係性〉の構造」は、よりいっそう複雑な事態を考慮しなければならない。

試しにここで、ある人間存在が別の人間存在と接触し、そこで“ゼロ”から新たな〈関係性〉を形成していく場合を想定してみよう⁽¹⁶⁾。ここでの〈関係性〉は、まず互いが互いの存在について何も知らない状態から始まる。そのため両者が〈関係性〉を成立させるためには、互いに試行錯誤を繰り返すことによって、相手を知り、時間をかけて〈関係性〉の“意味”を構築していかなければならないだろう。ここには、「中核的他者」との〈関係性〉の複雑さが良く表れている。なぜならここで「相手を知る」ことが求められるのは、相手もまた「〈関係性〉の場」を背負い、〈他者存在〉に対して「〈我-汝〉の構造」を取

り結ぶ〈自己存在〉であること、換言すれば、「私」が「相手」に対して「〈我-汝〉の構造」を持つと同じように、「相手」もまた「私」に対して「〈我-汝〉の構造」を持つ存在であるということが前提されているからである。

そしてこのことは、「中核的他者」との〈関係性〉が内包した、独特の不安定さを説明するための手がかりにもなる。というのも、「中核的他者」との〈関係性〉においては、この両者が持つ「〈我-汝〉の構造」が、常に一致しているとは限らないからである。もちろん「私」は「私」なりに「相手」を理解しており、そのうえで〈関係性〉を構築している。しかし「相手」がいかなる形で「私」との〈関係性〉を理解しているのかについて、「私」がそのすべてを正確に知ることなど不可能だろう。つまり「私」が理解し、望んでいる〈関係性〉を「実像の〈関係性〉」と呼び、「相手」が理解し、望んでいる〈関係性〉を「写像の〈関係性〉」と呼ぶのであれば、両者の間には、常に“緊張関係”が内在しているのである⁽¹⁷⁾。

本書では、このことを「実像-写像」の「内的緊張」と呼ぶことにしよう。この「内的緊張」は、「他者性」の本質が「意のままにならない存在」であることに由来し、それゆえ決して避けることができないものであると言える⁽¹⁸⁾。それゆえに、われわれが健全な〈関係性〉を維持していくためには、双方が「相手」の「写像の〈関係性〉」に気を配り、「私」を変容させることによって、不断に「実像の〈関係性〉」を調節していかなければならない。そしてそこでは、ときに文字通りに応答するだけでは不十分であるということもあるだろう。なぜなら「内的緊張」を解消するためには、しばしば互いが「相手」に“介入”することによって、「相手」の真意を引きだしたり、「私」の真意を伝えたりすることが求められるからである⁽¹⁹⁾。

とはいえ、現実的な生活実践に目を向けるならば、そこにはさらに考慮すべき問題がある。というのも「中核的他者」との相互作用は、通常、複数の人間が同時に関わり、しかもその場で居合わせる構成員が刻々と変化するといった、きわめて複雑な形式で展開されることになるからである。ここで〈自己存在〉は、ひとりひとりの〈他者存在〉に対して別々の「〈我-汝〉の構造」を持ち、「私」の“顔”もそれぞれに異なるものとなる。しかし多数の人間が同時に介入

するようになると、それぞれの「〈我-汝〉の構造」が同時進行で他の「〈我-汝〉の構造」に影響を与えることになり、〈自己存在〉は個々の発言や振る舞いにおいて、配慮すべき事柄、あるいは不確かな事柄が爆発的に増えていくことになるのである⁽²⁰⁾。そこから予想できるのは、きわめて不安定となった〈関係性〉と、ますます増大する「内的緊張」の負担に、われわれ自身が耐えられなくなるという事態であろう。

しかし「人間的〈関係性〉」においては、実はそうした事態が生じないための“仕組み”がはじめから備わっている。われわれはここで、この仕組みについて長年研究を重ねてきた社会学の見地を取り入れてみたい。まず注目したいのは、E・デュルケム (É. Durkheim) が「集合意識」(représentation collective) と呼んだもの⁽²¹⁾、あるいはより一般的に社会学において価値 (value) や規範 (norm) と呼ばれるものの働きである⁽²²⁾。すなわち人間集団においては、一定の状況下において何をなすことを期待され、何をなすことを禁じられるのか、といったことに関する何らかの認識や基準の枠組みが集団的に共有されており、それによって前述した〈関係性〉の混乱が回避されるということである。

この社会学的な価値や規範の概念は、われわれの枠組みで言えば、「ヒト」として生まれたわれわれが「人間」となるために不可欠な、世代を超えて受け継がれる「人為的生態系」、ないしは〈根源的葛藤〉を緩和し、「集団的〈生存〉」を実現させる「〈生〉の舞台装置」、より厳密には、そうした〈社会〉を構成する、非物質的な基盤としての「意味体系=世界像」と呼んできたものに相当すると言って良い。問題は、この全社会的な仕組みが、〈関係性〉の次元においていかなる形で説明できるのかということである。

ここで参考にしたいのは、前述のブルーマーらが「シンボリック相互作用論」と呼んだ社会学の出発点として位置づけている、ミードの「一般化された他者」(generalized other) をめぐる議論である。ミードによれば、人間は幼少期から他者との相互作用によって自我を形成していくが、その際、相互作用を通じて他者の「態度」(attitude) や「役割」(role) を取得し、それを自己のうちに「一般化された他者」として統合させる⁽²³⁾。例えば幼児が行う“ごっこ遊び”では、何らかの「役割」が模倣されるが、それが成立するためには、幼児は他

者が「役割」に伴って採用するだろう「態度」を内面化していなければならない。これに対して成長した子どもが行う「ゲーム」(game)、例えば“野球”が成立するためには、子どもが特定の「役割」や「態度」を取得するだけでは不十分である。そこでは参加者のひとりひとりが、まさにさまざまな位置についているすべての参加者の「役割」や「態度」、そして行為によって予測される反応というものを理解していなければならない。つまりこれと同じようにして、人間は成長の過程で、自らが属する社会集団において、さまざまな状況下において生じる「役割」や、他者が取りうるだろう「態度」の様式を「一般化された他者」という形で自己のうちに組織化する。「一般化された他者」とは、そうした意味において、自己でありながら、同時に「他者」の目線から「行為する私」を捉えた、いわば「もうひとりの私」であるとも言えるだろう⁽²⁴⁾。そして人々がそうした“参照点”となる「もうひとりの私」を共有しているからこそ、現実社会では円滑な相互作用が実現できるというわけである。

確かにこのミードの説明は、社会学的な意味での価値や規範というものが、実際に人間の〈関係性〉の次元において、いかなる形で働くのかを理解するための有益なモデルとなるだろう。とはいえここで強調されるのは、あくまで「行為する私」が、「他者」の目線からなる「もうひとりの私」を伴って〈他者存在〉と対面するという〈関係性〉の側面であり、この説明ではかえって、その背後に潜む「実像-写像」の「内的緊張」が見えにくくなるだろう。われわれの枠組みにおいては、〈自己存在〉とは、あくまで無数の「〈我-汝〉の構造」が織りなす「〈関係性〉の場」において漠然と規定されるものであり、そこでは〈他者存在〉に応じて無数の異なる「私」がありえるのであった。したがってここで問題となるのは、ミードらによって「一般化された他者」という形で論じられてきたものが、〈関係性〉を制御する仕組みとして、われわれの枠組みにおいていかなる形で説明し直されるのかということである。

ここで本書が導入したいのが、〈間柄〉という概念である。一般的に“間柄”と言う場合、それは「叔父／甥の間柄」といった「血族／親類の続きあい(続柄)」や、「師弟の間柄」といった特定の「人と人との関係」のことを指すものとして用いられている⁽²⁵⁾。本書では、ここにやや特殊な意味を与えよう。すな

わち〈間柄〉とは、特定の〈関係性〉を抽象化した概念であり、そこには特定の〈間柄〉に相応しい“振る舞いの型”であるところの〈間柄規定〉というものが内包される、といったようにである⁽²⁶⁾。例えばわれわれは、前述したものの以外にも、親子、家族、友人、親友、夫婦、恋人、同志、同僚、上司と部下、教師と生徒、クラスメート、地域の住人など、〈間柄〉を示す語を多様に用いている。これらはいずれも特定の〈関係性〉を示す“型”であって、そこにはそれぞれの〈関係性〉に相応しい、あるいは相応しくない“振る舞い”というものが同時に理解されているのである。その意味では、例えば「私」（あるいは「相手」）が子どもなのか老人なのか、同性なのか異性なのかといった身体に関わる属性もまた、互いの振る舞いを一定の形で方向づけるという点から、やはりある種の〈間柄〉として機能していると考えられることができるだろう⁽²⁷⁾。

この〈関係性〉の型としての〈間柄〉が、〈関係性〉を制御する仕組みとなりうるのは、それを共有することによって、われわれが互いの「〈我-汝〉の構造」を「形式化」することができるようになるためである。このことを、われわれが用いる〈間柄〉のなかでも、きわめて強力な「形式化」をもたらす、「財やサービスの提供者」と「財やサービスの消費者」という〈関係性〉——われわれはこの〈関係性〉を成立させている倫理のことを、これまで「経済活動の倫理」と呼んできた——から考えてみよう。まず前述のように、われわれが「中核的他者」と対面するとき、そこには常に「実像-写像」の「内的緊張」が潜んでいる。しかし「経済活動」の文脈において、例えば業務として窓口の対応を行うとき、あるいは商業施設で何かを購入するとき、われわれはそこで「中核的他者」と対面しつつも、「内的緊張」を感じることはほとんどない。というのも、ここでは双方が然るべき〈間柄規定〉によって、自らの望まれる振る舞いや、相手が返してくるだろう振る舞いを予測できるようになっているからである。われわれはそこで、「相手」の背後にある「〈関係性〉の場」や「写像の〈関係性〉」について、いちいち思いを馳せる必要はない。例えば「相手」は、いかなる生受、いかなる人生を背負ってここに立ち、いかなる事情、いかなる感情のもとでここに居るのか、そして「相手」は「私」という〈他者存在〉について、いかなる形で理解し、いかなる〈関係性〉を望んでいるのか——こう

した人格的要素は、ここでは単なる“ノイズ”となる。より端的に言えば、ここでは互いが無理をして「相手を知る」必要などない。逆にそれゆえ、互いにまったくの初対面であったとしても、われわれは簡単に〈関係性〉を成立させ、円滑な相互作用を実現することができるのである。

もちろん「財やサービスの提供者」と「財やサービスの消費者」という〈間柄〉は、後に見るように、一元的な「形式化」を強力に引き起こすという意味において、〈間柄〉の事例としては極端なものだと言えるかもしれない。実際、「私」がある人物と対面するとき、そこで働く〈間柄〉は、同僚であると同時に、趣味を共有する友人でもあり、さらには同じ高校時代の記憶を共有する同窓生であるかもしれない。このように現実の〈関係性〉においては、われわれは日々多様な〈間柄〉を——言語化されていないきわめて微細なものも含めて——幾重にも活用して生きている。そして多人数で行動する場合には、われわれはその場の状況や構成員の形によって、最も大きな意味を持つ〈間柄〉を柔軟に切り替えながら過ごしているとも言えるだろう。いずれにせよ、〈間柄〉という仕組みが存在することによって、「実像-写像」の「内的緊張」がもたらす負担は大幅に軽減される。〈生〉の実践に不可欠となるさまざまな集团的営為は、いわばこうして維持されてきたのである。ミードらが「一般化された他者」と呼んできたものは、ここではわれわれが行使可能な〈間柄〉の集合体という形で再定義されることになるだろう。

(4) 「人間的〈関係性〉」における〈距離〉の概念

とはいえ、「人間的〈関係性〉」をめぐるわれわれの議論においては、依然として考慮すべき問題が残されている。それは〈間柄〉が「形式化」によって〈関係性〉の負担を軽減する一方で、別の文脈においては、まったく新たな「内的緊張」をもたらすことになるからである。

このことを再び「財やサービスの提供者」と「財やサービスの消費者」という〈関係性〉から考えてみよう。前述したように、この〈間柄〉においては、そのきわめて強力な「形式化」によって、われわれは互いの人格的要素を無視